

病房にたわむ花

岡本かの子

青空文庫

春は私がともすれば神経衰弱になる季節であります。何となく
いらいらと落付おちつかなかつたり、黒くだまり込んで、半日も一日も
考えこんだりします。桜が、その上へ、薄明の花の帳とばりをめぐらし
ます。優雅な和なごやかな、しかし、やはりうち閉とぎされた重くるしさ
を感じます。日本の春の桜は人の眉まゆより上にみな咲きます。そし
て多くは高々と枝をかざして、そこにもここにもかしこにも人を
待ちうけます——時にはあまりうるさく執しつ拗ように息づまるような
なやましさをして桜は私の春の至るところに待ちうけます。こん
な神経衰弱者の強迫観念や憂鬱ゆううつ感かんは桜にとって唯ただ迷惑でありま
しょう。しかしそれらは却かえつて私が桜を多くめでのあまり桜の

美観が私の深处に徹し過ぎての反動かもしれません。かりに桜のない春の国を私は想像して見ます、いかに単調でありましょう。あまり単調で気が狂おう（?!）そして日本の桜花の層が、程よく、ほどこにあしろう春のなま温い風手は、徒に人の面のうちつけに触り淫れよう。桜よ、咲け咲け、うるさいまでに咲き満てよ。咲き枝垂よかし。

だが、まだ私は、桜花に就いての憂鬱感や強迫観念を語りやめようとするものではありません。

十年前、私は或る出来事のために私の神経の一部分の破綻を招いたことがありました。私の神経がそのために随分傷んでしまいました。その春、私が連れて行かれたその狂院に咲き満ちて

居^いた桜の花のおびただしさ、海^{みづうん}か密雲^{みつうん}に對するよう^{よう}に始め私は
 茫^{ぼう}漠^{ぼく}として美感にうたれて居るだけでした。が、やがて可^{かれん}憐^{れん}な
 精神病患者が遊^{ゆう}歩^ほするのを認めて一種奇^き嬌^{きやう}な美の反映をその満^ま
 庭^{んてい}の桜から受け始めました。無意味ににやにや笑うもの、天を
 仰^{あお}いで合^{がつしやう}掌^{しょう}するもの、襦^{じゆ}袢^{ばん}一つとなつて、脱^{だつ}いだ着物を、
 うちかえしうちかえしては眺^{なが}むるもの、髪を^{たば}といたり束ねたりし
 て小さな手鏡にうつし見るもの、附^つき添いに、おとなしく手をと
 られて常人のごとく安らかに芝^{しば}生^{せい}等の上を歩^{あゆ}むもの、すべて老^{ろう}
 若^{やく}の男^{なん}女^{にょ}を合^あせて十人近い患者の群^{むれ}が、今しも、病^{びやう}房^{ぼう}か
 ら昼^{ひる}餉^けののちの暫^{しば}時^{らく}を茲^{ここ}へ遊^{ゆう}歩^ほに解放されて居るのだと分^{わか}りま
 した。桜花が、しつきりなしにそれらの上へ散りかかります。患

者のうちのあるものは、うるさそうにそれを髪から払いのけ、あ
るものは手を振つてよけました。が多くは、細かい花びらが頬を
掠めて胸に入つても、一向無関心でありました。無関心が一
層あわれを誘いました。私は、診察の順番を待つ間——一時間
近く——うかうかとその場景に見入つて居りました。先刻
から、殊に私の眼をひいた一人の四十前後の男の患者がありまし
た。日露戦争の出征軍歌を、くりかえしくりかえし歌つては、
庭を巡回して居ました、その一回の起点が丁度私達の立つ
て見て居る廊下の堅牢な硝子扉の前なのです。男は其処へ来る
毎に直立して、硝子扉越の私達を見上げ莞爾としては挙手の礼
をしました。私達もだまって素直に礼を返してやりました。男は

それに満足しました身を返して広い桜庭を円形に歩み出すのでありました。軍歌は、幅の広いバスで、しかもところどころひどくかすれるのです、それは気のふれたひとの声の特長だとあとで聞きました。が、まことに悲痛に聞えました。男は日露戦争中負傷の際に気が狂つて以来ずっと茲の（ここ）病房（びやうぼう）の患者であるそうですが、病状は慢性な代りに挙措は極めて温和で安全であると聞きました。その可憐な男が、私達の前の一回の起点へ来る度に、一度は一度より増して桜の花片（はなびら）を多く身に着けて来るのでした。とりわけ男の頭へ沢山（たくさん）に散りかかつて居る花片の間からところどころ延びた散髪に交つて立つ太い銀色の白髪（しらが）が午後の春陽に光つて見えるのでありました。私はそれを見つけて見る見る憂鬱（ゆううつ）になって

しまいました。私に附^つき添^つて居た者が気がついて私を診察室の方へ連れて這^{はい}入ろうとした時に、廊下の突き当^{あた}りの中庭を隔てた一棟の病房から、けたたましい狂女のあばれ狂^{くる}う物音が聞^きこえ始めました。茲にもたわわに咲きたわんだ桜の枝の重なる下——その病房の一つの窓が真黒く口を開けて居^おりました。そこからすかに覗^{うかが}われる井の中の様^{よう}な病房の奥に二人三人の人間の着物の袖^{そで}か裾^{すそ}かが白くちらちらと動いて見えました……私はあわてて目を逸^そらしました。あわてた視線が途惑^{とまど}つて、窓辺^{まじべ}の桜に逸^それました。私はぞつとしました。その桜の色の悽^{せい}愴^{そう}なのに。

ずっと前の或^{ある}夜、私は友の家の離れの茶室^{ちやしつ}に泊^{とま}りました。私

は夜中にふと目をさました。戸の外を、桜樹立こたちがぐるりと囲む……桜が……しんしんと咲き静まった桜樹立が真夜中に……棟むねをあつ圧して桜樹立が……桜樹立がしんしんと……私は、ぞつとして夜具やぐをかぶった。

私はあくる日の朝日がたけて、その部屋のまわりの桜樹立が明るくあたりにかがやくころ目をさました。私の体は夜具の底にかく丸まり、じつくりと汗になって居いました。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十四卷」冬樹社

1977（昭和52）年5月15日初版第1刷発行

初出：「女性改造」

1924（大正13）年4月号

※表題は底本では、「病房《びようぼう》にたわむ花」となっています。

※「奇嬌《ききょう》」「しつきりなし」「じつくりと汗に」の

表記について、底本は、原文を尊重したとしています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

病房にたわむ花

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>